



# 庄内大豆通信 第4号

令和元年8月1日

庄内総合支庁産業経済部農業技術普及課 TEL:0235-64-2103 FAX:0235-64-2104

土壌の水分不足による収量低下が懸念されます。  
可能なほ場では干ばつ対策を実施しましょう。

大豆は、開花期から登熟初期にかけて、多量の水を必要とします。

この時期の干ばつは、収量・品質に直結するダメージとなります。水が利用できるほ場では、適切に水分を補給しましょう。

## ●うね間かん水を行う干ばつのめやす

- ・ 土壌表面が乾燥して白乾亀裂を生じているとき。
- ・ 大豆の上位葉が裏返ってみえるとき（水分が少なくややしおれる）。
- ・ 開花期から約2週間が特に効果的（右図）。

## ●かん水方法

30a規模のほ場では3日間に分けて徐々にかん水する（下図）。

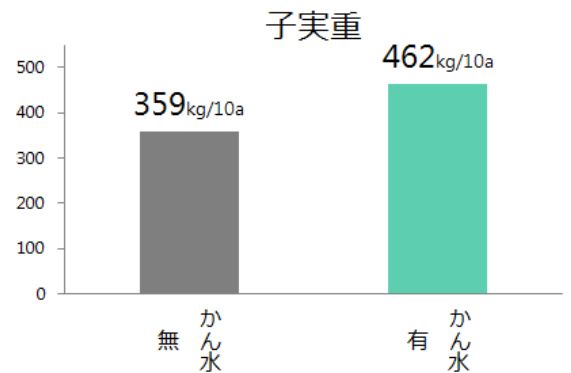
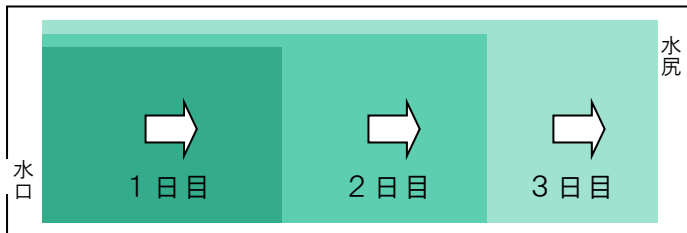


図 うね間かん水の効果 かん水は開花期～莢伸長期（1973山形農試最上分場）

## ※注意点

- 1 過度のかん水は湿害を招き、かえって収量にマイナスとなるので絶対避ける。
- 2 高温時に入水すると根が傷むため、夕方の涼しい時間帯に入水する。
- 3 入水後は速やかに排水する。また雑草が発生した場合、除草剤による対策を行う。

## 【地下かんがい可能な場合】

### ●地下かんがいを行う干ばつのめやす

開花期から登熟初期には降雨が少ない場合が多いので、うね間かん水のタイミングより早めにかんがいを始める。ある程度土壌水分がある状態からスタートすることで、用水の節約と均一な調節が可能。

生育期間中、水位に大きな変化を与えると減収することがある。

### ●かんがい方法

地下水位を40～50cmにあわせ、開花期～登熟初期の期間中制御する（この水位での多収事例が多い）。

**熱中症予防強化月間**

暑い日は無理をせず、  
こまめに水分と休憩をとりましょう。